
ダメ人間にささぐ歌

はねとふゆこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ダメ人間にささぐ歌

【Nコード】

N6441S

【作者名】

はねとふゆこ

【あらすじ】

ニート生活を送る主人公は作家になることを思い立つ。

翌日に誕生日を控えた20歳の冬。俺はどうしようもないくらいの自己嫌悪に苛まれていた。

部屋の万年床に体を投げ出して、ゴロゴロとたたき回った。枕に顔を埋めてここ数日で行った生産的な活動を指折り数えた。指は一つも折れなかった。

ふと3日履いたままのジーパンに異質な冷たさを感じて立ち上がった。暴れた拍子に倒れたグラスがカーペットに染みを作っていた。

なんで床にグラスなんて置いておいたんだ。ちゃんと机に置いておけばよかった。物が溢れかえってグラスの置き場がない机を睥睨して、大きな溜息をついた。

思い出したように、数ヶ月前に買った小説を手にとる。ネット上で知り合った友達に勧められた本。買ったその日にちょっとだけ読んで、そのまま部屋のインテリアの仲間入りをしていたものだ。どこまで読んだか思い出せないのが最初から読み始めた。数ページ読んでいくと見覚えのある文章を見つけた。

ああ、このページはもう読んだんだ。

それに気づいてげんなりした。

何か新しい事を始めようと思ってもすぐに飽きがきて、そしてしばらくしたらまた思い出したように最初から始める。永遠とその繰り返し。俺の人生そのものだ。

そうやってずっと後悔し続けてきた。何もしてなかったこの時間を全部集めたら、なんでもできたと思う。将来役に立つ資格をとったり、友達や彼女を作ったり、勉強したり、芸術を学んだり、お金をためたり。その全ての可能性を捨てて、今俺はここにいる。

今の俺はからっぽだ。なにもしない。なにもできない。誰からも必要とされない。だけど一人前に食って、寝る。生きている資格

なんてないのかもしれない。

ばおつと視線を彷徨わせる。からっぱな俺と同じでからっぱな部屋。物が多いけど本当に必要なものはなにもない。

机の上に放置されたカップラーメンの容器。その下敷きになっていた赤い柄のカミソリをおもむろに掴んだ。こんな陰鬱とした気分の方は決まってこのカミソリを手にしてしまう。

左の手首にカミソリの刃を当てた。

途端に呼吸が荒くなる。額に脂汗が浮く。口元が不適に釣り上がる。カミソリを持った右手が震え出した。

ふと我に返って、俺はカミソリを物が連なった部屋の隅に投げ捨てた。

また万年床に体を埋める。

「あぶないあぶない」

そう呟いて、急にやってきた眠気に身を任せた。

部屋の明かりも消さないまま、俺の意識は薄れていった。眠りにつくその前に、一度だけ目を開いた。傷ひとつない、綺麗な手首をみつめて、自嘲気味な笑いを零した。俺は今度こそ眠りに落ちる。手首を切る勇氣さえ、俺は持っていなかった。

ふと作家になろうと思いついた。舞台は学園。モテモテの主人公は幼なじみの岬ちゃんと転校生楓ちゃんの、二人のヒロインに好かれている。しかし主人公はドがつく程の鈍さで、二人の意思表示に気づく素振りさえない。ある日、主人公の幼なじみである親友の勝俣が主人公に相談を持ちかける。それは岬ちゃんと恋仲になるにはどうすればいいか、というものだった。主人公、勝俣、岬ちゃんは子供の頃から仲良しで、やんちゃな三人組だった。主人公は当惑した。ずっと子供のままだと思っていた勝俣が、岬ちゃんに恋をしていて、それを自分に打ち明けたことに。主人公は幼なじみである勝俣の頼みを二つ返事で受け入れた。

主人公の協力の元、岬ちゃんとのデートにまで持ち込んだ勝俣は、その日の別れ際に岬ちゃんに告白をする。岬ちゃんは勝俣の思いを受け入れ、告白にOKをだした。

翌日もいつも通り主人公、勝俣、岬ちゃんの3人で学校に通う。しかし主人公はどうにも居心地が悪い。当たり前である。勝俣と岬ちゃんは今や恋人同士なのだから。気を使って主人公にも話振る二人の優しさに、主人公は胸を痛めた。もうこの輪に自分は必要のない存在なのだ、と。

いつも通りに接しようと思ってもどうにもぎこちなくなってしまう。そうした中で主人公はいつしか幼なじみの二人とは距離をとりようになっていった。

そこに現れる転校生の楓ちゃん。屋上で寂しくパンをかじる主人公に楓ちゃんは手作りのお弁当を差し出した。主人公は最初は拒んでそれを受け取らなかったが、毎日のように手作り弁当をもってくる楓の根気に負けて、弁当に箸を通した。弁当はびっくりするくらいに美味しかった。

その日から主人公と楓ちゃんは一緒に昼食を食べるようになった。弁当を食べながら笑顔を浮かべる主人公。楓ちゃんと主人公の距離はみるみる縮まっていった。

しばらくして楓ちゃんは主人公を屋上に呼び出す。屋上の鉄扉をあけて現れた主人公に楓ちゃんは思いの丈を打ち明ける。主人公からみた楓ちゃんの背には、後光のような夕日が光っていた。主人公は楓ちゃんの告白を受け入れた。

それから家にいる時間以外を主人公は楓ちゃんと共に過ごした。楓ちゃんの色んな表情を見た。色んな話を聞いた。見かけによらず怖がりな所や、人見知りで主人公以外の異性とはまともに話せない所、料理の本を沢山読んで、弁当作りを練習したこと。色んな魅力に気づいた。

しかし楓ちゃんは気づいていた。いつも笑みを浮かべて自分に接してくれる主人公の笑顔が、作り笑いであることに。幼なじみ

達が付き合いだしてから、主人公は心の底から笑わなくなっていたのだ。

楓ちゃんは主人公の心を惹くために色んな事をした。しかしそれでも主人公は真の笑顔を見せることはなかった。

文化祭の季節が近づいてきた。主人公のクラスでは演劇をやることになった。演目はロミオとジュリエット。配役はくじびきで決められた。ジュリエット役は岬ちゃんだった。主人公は裏方に回りたい一心を込めてくじを引いた。ロミオ役は主人公になった。

そこまで一気に描き上げて、俺は大きく息を吐いた。煙草を一本、箱から取り出して時間をかけて吸った。作家に煙草は付き物だ。葉巻ならなおよかったのだが。

しかしこれは大作ができそうな予感だ。文章には所々粗が目立つが、心理描写はいい。どこに出しても恥ずかしくないくらいの出来だ。とにかくリアリティがある。特に勝侯君が岬ちゃんに告白するシーンなんて最高だな。

未完成の作品を読み返していくうちに、俺は何故だか涙が溢れていた。

それは青春を謳歌する主人公達に対する嫉妬か。それとも――。

主役になった二人は自然と一緒にいる時間が増える。皆に見守られるなか、ロミオになりきった主人公が、ジュリエット役の岬ちゃんに愛の言葉を投げかける。主人公はそういうシーンだけではどうしても上手く演じることができなかった。それは勝侯に対する負い目を感じていたからだ。

勿論勝侯は主人公に怒りを向けるなんてことはしなかった。しかし楓ちゃんは違った。その配役が決まってからというもの、楓ちゃんは岬ちゃんを無視するようになったのだ。

クラスメート達は俺たちの関係については誰も知らなかった。勝俣と岬ちゃんの事も。主人公達はたちは示し合わせたように、恋仲を公言するようなことは何故かしていなかったのだ。

文化祭の日が近づくに連れて、クラスメート達はピリピリとし始めた。特に楓ちゃんが。

主人公は一向にラブシーンが上手くならない。しかし岬ちゃんは、自分を無視する楓ちゃんへの当て付けか、寧ろラブシーンには特別熱を入れて演じた。

そして文化祭当日。主人公のクラスの出番が回ってきた。ステージ裏ではクラスメートが慌ただしくしている。主人公は胸に引つかかったなにかを取り出せないままにステージ上に躍り出た。

シーンは問題なく進む。そしてラブシーン。

主人公の目の前にはジュリエットのドレスを着た岬ちゃん。そこにいたのはもうかつて幼なじみとして笑いあった岬ちゃんはいなかった。いるのは恋を覚えて、大人になった岬ちゃんだ。

ロミオは愛の言葉をジュリエットに捧ぐ。ジュリエットは頬を赤らめた。ロミオの手を握るジュリエット。彼女の熱が直に伝わってくる。ジュリエットは微かに震える唇を動かす。そして紡がれたセリフは、台本にないものだった。岬ちゃんは、主人公の名前を呼ぶ。

主人公は岬ちゃんがセリフを間違ったのかと思った。でもそれは違った。岬ちゃんが握っている手はロミオの手ではない。主人公の手だった。

そして主人公はようやく気づくのだ。自分の本当の気持ちに。岬ちゃんと勝俣が付き合いだして、ぎこちなくなってしまったのは、幼なじみの関係が壊れてしまうからじゃない。岬ちゃんの事が好きだったからだ。

主人公は岬ちゃんの手を体ごと引き寄せる。吐息が混じりある距離。衣装越しに互いの熱が伝わる。岬ちゃんは拒まない。主人公の背中に手を回す。

主人公は岬ちゃんの唇に、自分のそれを寄せた。

文化祭が終わり、校庭ではキャンプファイヤーを囲んで生徒達が賑わっていた。主人公は立ち入り禁止の屋上へと着ていた。そこには勝俣が立っていた。

勝俣が主人公を呼び出したのだ。主人公は勝俣との関係がもうこれで壊れてしまうことも覚悟していた。しかしそれ以上に、岬ちゃんに対する思いは深かった。

主人公の登場に気づいた勝俣は振り返る。そこに浮かべていた表情は、怒りでも悲しみでもなかった。ただ温もりが溢れる笑顔があるだけだった。

勝俣は語った。

勝俣は主人公の思いに最初から気づいていた。岬ちゃんの気持ちにも。しかし諦めきれずに岬ちゃんに告白した。岬ちゃんはそれを断るだろうと思っていた。それをきっかけに主人公と岬ちゃんの仲が進展すればいい、と思っていた。しかし岬ちゃんは告白を受け入れた。勝俣は素直に喜んだ。しかし付き合っていくうちに、岬ちゃんが心の底から笑っていないことに気づいた。それはきつと、主人公に対する思いからくるものだろうと思った。

しかし岬ちゃんはその思いを勝俣に話すことはなかった。見かねた勝俣は主人公と岬ちゃんがロミオとジュリエットになるようにクラスメートの協力の元に細工をしていたのだ。これをきっかけに互いが素直になってくれれば、と思った。

全ては勝俣の思惑通りだった。

全てを聞いた主人公は涙を流した。屋上を去ろうとする勝俣の背中に主人公の感謝の言葉がかかった。

勝俣が屋上の鉄扉を開けると、そこには涙で顔をグシャグシャにした岬ちゃんが立っていた。勝俣は岬ちゃんに深く深く、頭を下げた。岬ちゃんは強がって勝俣の背中を叩いた。

全てを描き上げて、俺はキーボードに手を置いたまま意識を飛ばしていた。不意に鳴らされる玄関のチャイムで俺は意識を取り戻して、慌てて玄関に走った。

「おっす」

そこには少女が片手をあげて立っていた。

茶髪のショートカットがよく似合う、端正な顔立ちの少女。大きな目が彼女の利発的な見た目を全面に押し出していた。少し大きめの、少し色あせたダッフルコートは彼女に良く似合っていた。

俺は言葉を失った。視界が眩んでしまうくらいに気が動転して、言葉が上手く出てこなかった。

「なに慌ててるのよ」

少女は怪訝な眼差しを俺に向けた。俺がしどろもどろになっているのがおかしかったのか、少女はクククと乾いた笑いを浮かべて俺を押しつけた。

「お、おい。勝手に――」

「うるさいなあ。別に汚くたって驚かないわよ。知らない仲じゃないでしょ」

少女は頬を膨らませながら勝手に部屋へと上がる。俺は慌ててその背中を追いかけた。

「うわあ、これは予想以上ね」

「う、うるせえな。勝手に入ってきて文句いうなよ」

「はいはい、ごめんね」

少女は散乱した物を乱暴に蹴散らしながら布団の上に腰を下ろした。

「正にニートの部屋って感じね」

「いいんだよ、これで」

なにがいいのか自分でもわからないが。いや本当は全然よくない。

余りに久しぶりに会った人物に俺はやっぱり戸惑っていたのだろ。俺は恥ずかしさを覚えて、部屋の隅に正座した。

「で、一体なんの用だよ」

「まあまあ、それは追々……ん？」

もの珍しそうに部屋を見渡していた少女はふとある一点に視線を留めて、それに近づく。それはさっきまで俺が使っていたPCのディスプレイで。そこに表示されたままになっている小説……。

「あああああああああ!？」

俺は奇声を発しながら少女に飛びかかった。少女の背に馬乗りになる形で彼女を抑えこんだ。

「なになに、ロミオとジュリエット？」

「見るな!」

少女の目を手のひらで覆って、空いて方の手でマウスを操作してエディタを閉じる。しっかりファイルを保存するのは一応忘れな

「別にいいでしょ、減るもんじゃなし」

「減るんだよ」

「なつかしいじゃない。ロミジュリ」

「……………」

俺たちの高校最後の文化祭。クラスでやったのは演劇で、演目は――。

「そろそろ降りてくれんかね」

「あ、ああ。すまん」

俺が少女の背から降りると少女も体を起こした。乱れたダッフルコートの裾を伸ばして、俺の顔をちらりと見やる。

「いまちよつと懐かしい感じだった」

「は？」

「昔はよくこうやってじゃれてたじゃない？」

「何年前の話だよ……………」

と悪態をつくが、実を言うと俺も思い出していたのだ。まだ俺

たちが小学生だった頃、俺たちはいつも3人でつるんで馬鹿やっていた。その時はまだ俺も無垢で、怖いものなんなくて。でも中学った辺りで俺たちは大人の階段を登り始めた。それは中学の時分には低くゆるやかな階段に見えた。

「ねえ、ちよつと外でない？」

面白い悪戯を思いついたような表情で彼女は笑った。その表情は、昔とちつとも変わっていなかった。

スパンツと小気味良い音が、アパートの壁に反響して辺りに響いた。

「あんま強くなげんな。近所迷惑だろ」

「大丈夫よ、これくらい」

言いながら少女はまた大きく振りかぶる。俺は飛んできた速球を思いつきジャンプしてグローブに収めた。

「ノーコン！」

「うるへー」

おどけながら、俺の放った球をしっかりとグローブに収める。

運動神経だけは無駄にいいんだよな、昔から。

「こつこつって正に青春ってかんじじゃない？」

「そうか？」

アパートの窓から差す僅かな光を頼りに俺は白球を追う。日はとくに沈んでいる時間。俺たちは聞こえるか聞こえないくらいの声量で話した。いつ窓の一つが開いて怒られるかもわからない。

「昔よくやったよね」

「また昔かよ。昔昔ってそのうち桃太郎とか出てくるんじゃないかねか」

わざわざ口に出さなくなつて、嫌でも思いだすさ。楽しかった時代。まだ将来に希望を抱いている時代。最も輝いていた日々。いつからこうなつてしまったんだろうか。

「いいじゃない。楽しい思い出は、いつだって心の支えになってくれる。いつ思い出してもいいんだよ」

「今の自分が、惨めになるだけだ」

「荒んでるなあー」

荒みもするよ。お前はいいかもしれない。充実した日々を送って、たまには昔の馴染みにでも会ってみるか。って思い立ってさ。そんな余裕すら、俺にはないんだよ。過去に携っている余裕すらないくらいに、未来に不安を抱いちまってるんだよ。

「どうせ荒んでるさ。お前と違ってな」

だからそんな皮肉だ。って簡単に喉から滑り落ちてくるんだよ。こんな些細な事で、腹を立てたりするんだよ。

「お前と違って、か」

不意に少女が白球の往復を止める。グローブに球を収めたまま、俯く。

「おい、どうした」

「……なんでもない」

言いながら放られた球は、拍子抜けするくらい軽かった。

「……………」

背後から聞こえる水音。混じってハミングが聞こえてくる。

落ち着かない。どうも。

自分のうちの風呂に、異性が入っているというだけで、こんなにも落ち着かないものなのだろうか。

シャワーを浴びる彼女の姿を想像してみる。使い慣れて容易に想像できる風呂場。そこに裸体の少女が浮かび上がる。あちこち成長した体が湯船に沈んでいく。

「ああ！」

変な声をあげて頭を抱えた。これはいかん。麻薬よりも危険な香りがする。

枕に頭を打ちつけて妄想を振り払った。

「掃除でもすつか」

改めて見ると、とんでもなく汚い。正に二トだ。とりあえずその辺に散らばった本やらを一箇所に積み重ねた。それでも大部分屋が広くなった気がした。

布団を丸めてクローゼットに押しこむ。デスクの上に散乱したゴミを纏めた。

まともな掃除なんて何ヶ月振りだろうか。

掃除の仕方すら忘れてしまいそうなほど古の記憶だ。俺に彼女がいたら、毎日掃除するのかな。いや、彼女が居たら寧ろ掃除してもらえるのか？

なんて事を考えていたら少女が風呂から上がってきた。

厚いダッフルコートを脱いで、俺の貸したシャツとハーフパンツ姿になった少女は、濡れた茶髪にバスタオルをのつけて現れた。

濡れた髪とか、シャツを押し上げる胸の膨らみとか、上気して赤みを帯びた肌とかを見て、俺の胸は高まった。

「なによ」

そんな視線に気づいてか、少女は冷たい視線で俺を見下ろした。厚着していて判らなかつたが、この数年で少女はまた成長したようにみえた。特に胸が。

「大人の女性の風呂上りは、童貞君には刺激が強かつたかしら」

「童貞じゃない」

憎たらしく口角を釣り上げる彼女に俺は強気に言い放った。勿論、嘘だけど。

あらそうかしら。言いながら少女は少し綺麗になった床に腰を下ろした。

「あんたも入ってきなさいよ。汗くさいわよ」

「言われんでも入るわ」

キャッチボールする前からちよつと汗臭かつたからな。風呂、3日くらい入ってないから。冬場なら1週間くらい大丈夫だから。

「変なことすんなよ」

「しないわよ、あんたじゃあるまいし」

「どういう意味だよ……」

ニヤニヤと笑う少女を無視して、風呂場に向かう。使い慣れている筈の自分ちの風呂場で、何故か緊張しながら汗を流した。

俺が風呂からあがると、四つん這いになって臀部を突き出すような格好で少女はPCのディスプレイに向かっていた。

「おい、何してんだよ」

少女は答えないまま、ディスプレイに視線を据えている。俺は異変に気づいて慌てて、少女に身を寄せる。

「——あ」

少女が見ていたのは俺が書いていた小説だった。彼女は速読でもするみたいに一心不乱に目線を動していた。

「見るなっ!」

俺は彼女を押しつけてファイルを閉じた。

見られた…。

あれを見られた…。

「ねえ、これってフィクション?」

少女は呆気にとられた様子で、俺を見た。

「あ、当たり前だろ」

「そう。そうよね」

自分に言い聞かせるように彼女は呟いた。

「でもそれっておかしいよ」

「な、なにがだよ」

「自分を小説に登場させて、嘘の心理描写をするの?そういうのって普通、自分の考えとか隠してる思いとかを表現したくて書くものでしょ?」

「フィクションだって。名前は参考にしただけだ。文化祭とか

も、全部」

我ながら苦しい言い訳だと思った。誰が聞いても嘘だってわかる。

だってそれは、俺たちが経験した高校生活そのままなんだから。

「……………」

少女―

天音岬は俺の顔を無言で見つめた。俺の心の内を見透かそうとする様に。穴が悪ほど俺を見つめた。

「本当の事、教えてよ。これは全部真実なんでしょ？ 小説の中であなたが考えていることも全部」

「ち、ちがう」

俺はうわ言のように呟いた。

俺はずっと嘘をついてきた。今日の前にいる少女、天音岬に対して。それは高校を卒業してから今まで、そしてこれからもずっと秘密にしておくべき事だった。

「もう過ぎたことでしょ。教えてよ」

岬は四つん這いのまま俺に近づく。開いた胸元から、成長した上半身が覗く。潤んだ双眸が俺を見つめる。赤みを帯びた唇が小さく動いた―

「――ねえ勝侯君」

「……………」

そうだ、俺は勝侯、勝侯俊哉。

小説の中で主人公と岬の仲を仕立て上げた幼なじみ。

そしてあの小説では語られていない部分。岬を騙したあのシーンが、記憶の底から蘇った。

「いや、ホントお前らにはイライラさせられたぜ」

仲睦まじく手を繋ぐ岬と男子生徒。ロミオとジュリエットの格好の二人は妙に輝かしく見えた。

「ごめん、俊哉。本当に」

少女は深く頭を下げた。

「いや、悪いのは俺だよ……。自分の気持ちに嘘を付き続けた。そのせいで……」

男子生徒も同じく頭を下げる。

そんなに謝るな。俺が惨めになるだけだ。

俺は苦々しく表情を歪ませた。しかし頭を下げたままの二人にその表情は見られていない。

「ホントにいいんだ。っていうか岬に告白したのも、お前らをくつつけるためだからさ」

「え、そうなの!？」

岬は驚愕に大きく口を開く。傍らの男子生徒は無機質な表情で、視線を逸らした。

彼は知っている。それが嘘だということを。

俺が口止めたのだ。岬が俺に気を使わないように。

「じゃあ全部演技だったの？ 告白も、全部？」

「そうだよ、当たり前だろ。俺はお前みたいな奴、女とも思っ
てねえよ」

「それはそれで腹立つんだけど……」

岬は眉間に皺を作って俺を睨み付けた。

「だから、私に何も手だそうとしなかったのね……。ただのチキンかと思ってたわ。ごめんね俊哉」

「はは、いいっていいって」

岬の言葉が鋭いナイフになって俺に突き刺さった。付き合ってた手も握れないなんて、チキンどころの話じゃねえぞ。

落ち込んで顔を伏せた俺に、男子生徒は笑顔を向けた。俺はそれに答えるように微笑み返した。

「あ、そうだ、俊哉。私たちこれから映画見に行くんだけど一緒にいかない？」

岬は本当に何も考えていないような無垢な笑みを浮かべてそう

いった。いや実際何も考えていないのだろうけど。

「そんな野暮なことするわけねえだろ。それに居心地悪くてたまんねえよ。お前もこんな気持ちだったんだな、お前のためとはいえ、悪いことしちまったかな」

と俺はもう一度男子生徒に笑顔を向けたのだ。彼は俺の内心を悟って、少し表情を濁した。

「そっか、じゃあまたね」

二人は手を繋いで俺に背を向けた。俺はその背中を追いかけて男子生徒に耳打ちをした。

「俺のことは気にせず楽しんでこいよ。もし別れるようなことになったら、今度こそ本当に岬はもらっちゃうからね」

わかってるよ、と彼は呟き、去り際にもう一度、ありがとう。と言った。

「お前には、黙っておきたかった……。本当の事を言ったら、お前は素直にあいつと付き合えないだろうし、ぎこちない関係にしくなかつたから」

全てを岬に話してから、俺は後悔の念に苛まれた。膝の間に顔を埋めながら、俺は泣いていた。

岬は何も言わずに壁を背にして座る俺の横に腰を下ろした。そして横から俺の髪を撫でた。

岬のそんな優しい仕草が俺にはつらかった。ずっと。高校生のあの時も、そうだ。俺の事なんて好きでもないのに、俺に気をつかって付き合ってくれたあの短い日々。確かに岬は、俺と一緒にいても作り笑いしかしていなかったかもしれない。でも俺にとってその日々は人生の中でもっとも幸せで、充実していた時間だったんだ。

岬への思いをひた隠しにしながら見る、幼なじみ二人が仲睦まじくする様子は、思い浮かべただけでも胸が傷んだ。それは今も変わらない。結局おれは体のいい脇役にしかなれない。そして今は、

エキストラさえも程遠いダメ人間に成り下がっちゃった。

それは岬のせいでも、あいつのせいでもない。俺だ。俺自身の責任なんだ。

「気づいてあげられなくてごめん」

あの時みたいに、柄にもなく謝罪を口にする岬。でももうあの時代とは違う。二人は付き合って大人になった。俺は子供のままだ。俺はまだ高校生のまま、あの時代に取り残されている。

ずっと一緒だった幼なじみは、今はもう遠くに行ってしまった。

「ごめんね俊哉……」

俺が泣き止むまで、岬は俺の頭に置いた手を止めることはなかった。

翌日、クローゼットの中で目覚める。岬に布団を使わせたので、俺はここで寝ていたのだ。妙な体制で寝ていたせいか、体中が捻挫したみたいに痛かった。

眠たい体を無理に起こしてクローゼットを開けると、布団の上にはだれもいなかった。

また俺は一人だ。

そう独り言ちで、俺はもう一度クローゼットに潜り込んだ。もうずっと、ここで寝ていようかな。

「起きて、俊哉」

体を揺すられて目を覚ますと、目の前には岬の整った顔があった。

ああまだ夢か。だったら何したって構わないよな。

俺は岬の首に手を回すとあらん限りに力でもって岬をクローゼットに引きずりこんだ。悲鳴をあげながら俺の上に岬が転がってくる。

「ちょ、ちょっと。なにして……」

何かごちゃごちゃ言っていたのでその口を塞いでやった。俺の唇でもって。

すると、じたばたと暴れていた岬は「ん…」と艶めかしい声を上げて、俺の上で猫のように大人しくなった。長いキスを終えて唇を離す。

「妙にリアリティのある夢だな」

今や俺と岬はびったりとくっついていている。岬のあらゆる部分が俺と触れ合い、熱を伝えあっている。俺の胸板の上で押しつぶされいる岬の膨らみに俺は手を宛てがった。

「ちよつと、いい加減に……」

岬を無視して俺は手に力を込めた。その瞬間――

「いい加減にしろっていつてんでしょ!」

嵐のような怒号が聞こえたかと思うと、頬に強烈な衝撃が走る。

あれ、夢じゃねえじゃん。

ってことは…。

体を起こしてクローゼットから顔を出すと、岬がパソコンのディスプレイを頭上に抱えているのが見えた。

俺は慌ててクローゼットの戸を閉める。

「え、やばくね」

クローゼットの外では岬がディスプレイを持って待ち構えている。次顔を出したら間違いなくあれが顔面に振ってくるだろう。

それは死を意味していた。

やっぱりクローゼットで生活すっか。

そう思い立って俺はもう一度眠りに落ちた。

「ひどい顔ね」

テーブルを挟んで向かい側に座る岬が、汚物でもみるように顔を歪めた。手には数ヶ月振りに炊いた白飯と割り箸。

「お前がやったんだろうが！」

俺はテールを叩いて叫んだ。

「あんたが変なことするからでしょ。純情な乙女に」

「寝ぼけてたんだから、しょうがないだろ」

とはいえ、無理やり唇を奪って、胸まで揉んだのだから当然の制裁とも言える。握った右手と唇にはまだその感触が残っているような気がして、俺は岬から目を逸らした。

「ところでお前、さっきどこ行ってたんだよ」

最初に目覚めた時には、確かに岬の姿は部屋になかった。てっきり黙って帰ったのだと思っていただけ。

「コインランドリー。洗濯機もないなんて、信じられないわ」

岬がスーパーで買ってきたであろう惣菜をつつきながら、悪態をついた。いつの間にか岬の服装は昨日うちを訪れた時のものに戻っていた。シャツの上に合わせた地味な色のセーターは彼女の胸を強調して見せていた。

「脱衣所に溜まってたあんたの服も適当に選んで洗ったいたから」

岬が指差した部屋の隅には透明なビニールに入った俺の服が置かれていた。ここ数ヶ月忘れていた洗濯用洗剤のさわやかな香りが鼻に届いて、すこし幸せになった。

「助かるよ、ありがとな」

「うえ」

俺は礼を言つと岬は眉間に皺を寄せて少し身を引いた。

「あんた、お礼なんて言えるようになったのね。気持ち悪いっ
たらないわ」

「なんだよそれ」

確かに高校までの俺は人に感謝することはあってもそれを口に出したり頭を下げたりすることは殆どなかった気がする。

「廃人同然の生活をしていても、人は確かに成長するんだな」

「そんな当たり前のことができるようになっただけで胸を張ら

れても困るんだけど」

なんて皮肉を言う。だが俺は知っている。岬もあの時まで、人に頭を下げることなんてしたことなかったということを。

「お前は俺のお陰で感謝するということを学んだんだ。それを忘れるなよ」

特に意味はない。ただ少しばかり優越感に浸りたかったただけだ。また皮肉で言い返されるとばかり思っていた。だから岬が急に箸を止めて俯いてしまうのを見て、俺は焦ってしまった。

「確かにそうかもね……。本当に俊哉には感謝してるわ」

「えらく素直じゃないか。似合わねえぞそういう仕草」

そんな彼女の表情が、その存在を酷く希薄にばやけさせている気がして、いたたまれなくなった俺はその感情を隠すように岬の頭を小突いた。

「いつたいなあ、なにすんのよ！」

「感傷的になるのは勝手だけど、他所でやってくれねえかな。」

飯が不味くなんだよ」

「むー」

俺が言つと岬は頬を膨らませて俺を睨みつけた。そしてやけ食いするように白飯をかきこむ。その姿が本当に昔の岬そのままで、俺は安心してしまう。

「あんたはいいわね。ずっと子供のままで」

「は？」

またつまらない皮肉を言われたのかと思った。でも違う。笑顔を浮かべながらも、俺は岬の瞳に灯る憂いを見逃さなかった。

俺は何も言えなくなってしまうて、黙って箸を進めた。岬もそれきり口を開こうとはしなかった。

その日の晩。俺たちは岬の買ってきた缶のビールで乾杯をした。引籠もりのニートに何を乾杯することがあるんだよ、と自嘲

気味に問いかけたら、岬は乾いた笑いを浮かべながら言った。「輝かしい過去に」

成人してからというもの、俺は酒を酌み交わすという経験が一度足りともなかったので、まともに飲むのはほぼ初めての状態だった。軽い気持ちでビールをガブガブ呷っていると、体内の溶けこんでいくアルコールは、すぐに俺に牙をむき出しにして襲いかかってきた。

結果、俺は子供の頃にかかったインフルエンザの時よりも酷い頭痛と吐き気に見舞われてトイレの住人になってしまった。俺よりも遙かに多量のビールを飲んだ筈の岬は、上機嫌で、便器に頭をつっこむ俺の背中をバンバンと叩き続けていた。

その後の記憶は殆どない。ただ布団に倒れこんだ俺を背もたれにして、いつまでも思い出話を繰り返す岬の声だけははっきりと覚えていた。

翌日、激しい頭痛に頭を抱えながら目を覚ますと、そこに岬の姿はなかった。また勝手に出かけたのだろうかと思った。

部屋のゴミは廊下に纏められていたし、雑誌類は綺麗に束ねられていた。PCのデスクも拭き掃除の後が一目でわかるくらいに綺麗になっていたし、窓は開け放たれて気持ちのいい空気が部屋を満たしていた。

それが岬なりの、俺に対する謝礼の表現だったのかと思った。そして岬はもう、ここに帰ってくることはないのだらうと、直感的に悟った。

俺は重たい頭を抱えながら布団を畳んで、ベランダに運んだ。住宅街のしなびた空気さえ、今の俺には気持ちいい。緩やかに吹く冷たい冬の風が、伸びきった前髪を揺らした。日差しを体中で浴びて、光合成をする。今なら植物にだってなれる気がした。

ベランダで煙草をふかしながら麗らかな午後を満喫していると、

不意に家の電話が鳴った。滅多にならない電話の着信音に、一瞬俺は戸惑うが、すぐに煙草を灰皿に押し付けて受話器を取った。

岬からのだろうか、と一瞬期待したのだが、受話器からは聞きなれない女性の声が聞こえてきた。

「もしもし、勝俣くん？」

「あ、ああ。そうですけど、どちら様ですか」

他人行儀、という行為を忘れかけていた俺はしどろもどろ対応する。

「私よ、私。わからないの？」

誰かと聞いて、私私、と連呼していいのは幼なじみか彼女くらいのものだろう。しかしそのどちらでもないことは自明であった。

しかし、である。

ふと天啓が降りたみたいに俺の脳は刺激され、ふと高校時代の風景が頭に浮かんだ。

きつと岬と一緒にいたからだろう。遠に忘れかけていたその声の主は俺は当たりをつけた。

「もしかして、楓か？」

「そうよ、久しぶりね」

毒を吐かせたら最適な、棘々しさを感じる声に俺は聞き覚えがあった。高校時代を共にした、クラスメイトの一人であり、俺のノンフィクション小説に登場する二人目のヒロイン。

橘楓。

俺が例の小説を書いた途端に、その二人のヒロインが俺とコンタクトしてくるなんて、どんな巡りあわせだろう。

「懐かしい面子が揃い踏みだな」

「え？」

「いや、こつちの話だ。ところで何の用だよ」

「あなた、その調子じゃ知らないみたいね」

「何がだよ」

「坂本君のことよ……」

途端に落ちる声のトーン。それだけで楽しい話でないことは容易に想像できた。嫌な予感しかなかった。

俺は受話器を耳に、有らん限りの力で押し付けるようにして、楓の声に耳を澄ませた。

そして楓から知らされる。

次の瞬間には、受話器を放り出して俺は駆け出していた。

思えば、最初から岬の様子はおかしかった。いきなり何の連絡もなしにうちを訪ね、ただただ高校時代の思い出ばかりを語った岬。不意に見せる憂いの表情。

でも俺は黙ってその顔を見ていた。聞けなかったのだ。それは岬の事を気遣った訳じゃない。ただ、怖かった。また一人になるのが怖かったのだ。

それを問い詰めたら、岬は居なくなってしまうじゃないかって。そんな事を考えたら、俺はもう怖くなって、それ以上何も言えなくなってしまった。

俺は馬鹿だ。岬の事は何も考えず、ただ自分のことばかり心配していた。俺は成長なんかしていない。大人になった振りをしていただけ。その心はやはり、高校時代に置き去りにされていたのだ。その時から俺の孤独はもう、始まっていたのだ。

俺は走った。心臓が内から食い破られそうな程の痛みを感じて、それでも足を止めなかった。

岬はどこにもいなかった。そんな遠くへは行っていない筈だが、それでも闇雲に探していたのでは見つかる筈もない。俺は立ち止まって考えを巡らす。

膝に手をあてて、今にも崩れ落ちそうな体を支える。肺が酸素を求めて悲鳴を上げる。

岬の言葉を思い出す。彼女は何か言っ
てなかったか。だが浮か
び上がるのは学生時代の思い出話ばかり。

「――思い出」

そして俺は、思い立って、また走りだした。

そして辿りいたのは、俺たちの思い出が眠るあの場所。俺たちの通っていた高校だった。

平日の昼間だというのに、外からでもすぐにわかるくらいに校内は閑散としていた。校門は閉じられ、そこに立ち入り禁止の札が掛かっていた。

俺はこの高校が廃校になり、近いうちに取り壊されるという話を思い出した。

確信はないけど、それでももう思い当たるのはこの場所しかなかった。俺は校門の淵に手を掛けて、それを飛び越えた。

校舎内は、そこだけ時間が止まっているみたいに感じた。事実そこには目立った変化は殆どなくて、記憶のままの光景がそこには広がっていた。

俺は土足のまま校舎にあがる。廃校になっているとはいえ、妙な背徳感を感じつつ廊下を走った。

最初に向かったのは俺たちが卒業の年に通った教室。しかしそこには人の気配すら感じ無かった。

急がないといけない。そう感じながらも、俺は教室に足を踏み入れた。

教壇にたつて、教室を見渡す。そこは俺たちが卒業したそのままの格好でそこにあった。

瞼を閉じれば、今でもその座席順が容易に思い出される。

感傷に浸るのもほどほどに、俺は教室を後にした。ここにいないのであれば、あと考えつくの場所は一つしかない。俺は心臓をバクバクと鳴らしながら、静寂の支配する階段を登っていった。

屋上へと続く鉄扉をあけはなつ。気圧の違いで冷たい風が俺の髪を揺らした。日の光で目がくらむ。思わず顔を背けて、ようやく目が慣れてくると、うつすらとアスファルトの上に人影が浮かび上がった。

「よお、探したぞ」

「やつぱり、来たんだ」

そこには岬が立っていた。俺に気づくと屋上の風に揺れる髪を抑えながら、岬は瞳を伏せた。

「懐かしいよね、この場所。でも来月には取り壊しが始まるらしいよ。知ってた？」

「ああ」

あっけらかんと言いつつその口調とは対象的に、岬の表情には一目でわかるくらいの陰りがみてとれた。

「俊哉には本当に悪いことしたって思ってるよ。私、俊哉の優しさに甘えていたのかもしれないね」

岬の声は震えていた。今にも泣き出してしまいそうなその声に、俺は必死に耳を傾けた。

「こないで」

岬に近寄ろうと、歩み寄る俺を、その震える声でもって止める。

「佳祐さ、死んじゃったんだよ」

「さつき楓から聞いたよ。病気だったんだってな」

佳祐。坂本佳祐は俺の書いた小説のその主人公として描かれた人物の本名だ。彼は卒業してからもずっと、岬と付き合っていたのだろう。

「何も言ってくれないんだよ、あいつ。薄情だよね、黙って病院に通ってたんだって。私にバレないように、入院もしないでさ」俺にはわかる。何年もずっと付き合っていた佳祐の考えていることくらい。

それは佳祐の、命をかけた最期の嘘。余命を知らされた佳祐は、岬と今まで通りの生活することを望んだのだろう。最期の日まで、

佳祐は昔のままの、その日々を堪能したかったのだ。

「ずっと、過去に囚われているのは俺だけだと思ってた。でも違った。それは佳祐もお前も、そして楓もみんな一緒だったんだな。あいつ電話口で大泣きしてたぜ。きつと今でも、佳祐の事を……」

「楓ちゃんにもちゃんと謝りたかったな。でももう遅いね」

その言葉の意図が俺にはわかる。

「過去は消えることがないと思ってた。でもそんなことないんだね。ちよつとした事で、思い出なんて音を立てて崩れ去って、そこに縋る人達を、振るい落とす」

過去にだけ縋って生きてきた俺たちにとって、それはもう耐えられない程の苦痛なのだ。

「岬、俺は止めないよ。失意の底にいるのは俺も一緒だ。ずっとからっぽだった。ただ情性で生きてきた。でも今はもう、それすらも苦痛なんだ」

佳祐の死をもつて岬は死を望んだ。だが俺にはそんなきつかけなんてなくなつて、ずっと願っていたんだよ。自分の死を。

「付き合うよ、岬」

「俊哉……」

岬は俺の名前を呟き、そして俺に手を差し伸べた。俺は彼女に歩み寄つてその手を取った。

岬の手は驚くくらいに冷たく、乾燥していた。

「乾杯だ」

俺は何ももたない拳を空に掲げた。

「なにに？」

岬は俺に問いかける。

「輝かしい過去に」

ふと岬は笑つて、そして俺と同じように手を掲げた。二つの拳をぶつけて、俺たちは足を踏み出した。

それは俺が人生の中で唯一踏み出した、未来への一歩だ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6441s/>

ダメ人間にささぐ歌

2011年4月24日08時31分発行